

種名	ウ キ ヤ ガ ラ				
	Scirpus fluviatilis				
					
分類	被子植物単子葉植物綱カヤツリグサ科	俗称	ヤガラ	生活型	多年草、抽水植物
分布	北海道から九州にかけて分布するほか、朝鮮半島、中国(本土、台湾)、北アメリカにも分布する。				
形態	根: 地下を葡萄する根茎が長く発達し、径3～4cmのサトイモ状の塊茎が数珠状につながる。塊茎から多数のひげ根が生じる。 茎: 4～5月頃、塊茎から新芽を出す。1個の塊茎から1～2本の茎が直立し、高さは0.7～1.5mになる。茎は3稜形、革質で堅く、基部は球状に肥大するが、上方では横断面は一辺の長さが約3mmの三角形となる。 葉: 葉は線形で扁平、濃緑色で堅く、茎の下部に多くつく。長さ30～50cm、幅5～12mmで、先はしだいに細くなって尖る。葉の上部は中央脈が明瞭。 花: 花期は5～8月。茎の先に長さ7cm位の花柄を3～8個つけ、小穂をかさ状に広げる。1つの花柄には1～4個の小穂がつく。 小穂は茶褐色、楕円形で長さ1～2cm、幅6～8mmで、細かい毛が密生し、中央のものほど大きい。花序の基部には花序より長い苞葉が2～5個つく。 果実: 果実は倒卵形の瘦果で、長さ3.5～4mm、正3稜形で基部はくさび形に伸び、先端は嘴状に尖る。初めは白色であるが、熟すと光沢のある黒褐色になる。長さ約3mmの刺針状の花被片が6個、下向きにつく。				
類似種	コウキヤガラ(P.77)はウキヤガラより小型で茎の高さは0.4～1m。花序は頭頂に密集する1～6個の無柄の小穂からなる。果実は長さ約3mmの広倒卵形で光沢のある黄褐色の瘦果で刺針はない。海岸に近い水湿地に多い。イセウキヤガラは、葉身が鋭3稜形で小穂は常に1個、刺針状の花被片が6～7個ある。シオクグ帯より深いところに生育し、耐塩性はかなり強い。木曽川下流に見られる。				
生息場所	全国各地の池沼の水辺、水湿地、休耕田などに群生する。泥質の浅い水中に生育し、冬季には枯れて水面に浮く。 マコモとともに生育し、ウキヤガラ・マコモ群集にまとめられている。				
繁殖	種子、地下茎(根茎)および塊茎で越冬し、繁殖は種子と塊茎で行なう。花期は5～8月で、結実して瘦果を作る。果実は7～10月に熟す。繁殖の中心は塊茎で、4～5月頃、地下茎に数珠状にできた塊茎から新芽を出す。				
他生物との関係	抽水植物群落はコイ、フナなど一部の魚類の産卵に利用されるほか、稚魚の隠れ場や増水時の避難場所にもなる。ソウギョやヌートリアなど、草食性の外来種の食草となる。				
配慮のポイント	河岸の保全や、泥や水中の栄養塩の除去に役立っているため、河川改修工事を行なう場合は、できるだけ群落を存続させるように配慮する。ウキヤガラなどの抽水植物は、魚類などの産卵や避難場所として利用されている。水域と陸域の連続性の確保は鳥類・昆虫・両生類などの生息の観点からも重要となる。やむを得ず抽水植物群落を改変する場合、魚類の産卵時期、鳥類の営巣時期を避けるとともに、代替地に同様の環境を創出することを検討することが望ましい。				
引用文献: 『川の生物図鑑』を改変					